

雜 錄

左右田博士の著『經濟哲學の諸問題』を讀む

田 邊 元

カンテンデルバントの講演 *Geschichte und Naturwissenschaft* から出發して自然科學對文化科學の方法的相違を明にし、カント及び現今のマルブルヒ派が單に數學物理學に對して成せる所を全く新なる文化科學に對して試み、以て批判哲學の完成を期せんとするものはリッカートである。氏の著 *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung* が認識論、方法論に於て獨特の位置を占むるものなるとは否定し得ざる所である。其思想は已に久しく我學界に紹介せられて、少くとも論理上氏の唱へる如き史學、文化科學なるものが可能なることは一般に認められて居ると思ふ。唯併し

ながら實際現存する歴史或は廣く文化科學なるものがリッカートの唱ふる如き價值的見地に於ける個性記述として、沒價值的見地から普遍的法則の定立を目的とする自然科學に對立するものであるといふ點に就いては此等の學の専門學者に少なからぬ異論があるやうに思はれる。我々哲學の立場から此問題に興味を有するものにとつては、この際歴史或は文化科學の専門家が眞正なる哲學的批判の立場から、其等の學の基礎方法を説くのを聽くことが最も望ましいことであるといはなければならぬ。恰も左右田博士の『經濟哲學の諸問題』は我々の此望を滿たすのみならず、一般に哲學上

多くの教を我々に齎すものとして世に出でた。此書は著者が従來種々の機會に公にせられた經濟哲學の研究に關する論文を集めたものであつて、「思想問題として見たるサンデカリズム——ベルグソン哲學との交渉」、「カント認識論と純理經濟學」、「經濟學認識論の若干問題」、「經濟政策の歸趣」、「經濟哲學の問題」外二篇を含む。著者が批判哲學の精神を體得して、如何に明快周匝なる思索をせられるかは已に本誌第五號に於て今舉げた「經濟哲學の問題」なる論文を読み、又最近本誌第廿四號に掲げられた「極限概念としての文化價值」の一篇を讀まれた人の知られる所であつて、今更贅言を費す必要が無いと思ふ。此書の諸論文何れも經濟學を中心として一般に批判哲學に關する深遠の思索を内容とし、常に斯學の基礎に就いて明晰なる知識を興ふるのみならず、一般の哲學問題に就いて我々を啓發することが少々でない。我國専門

科學者の哲學的思索に於ては勿論、哲學專攻者の研究に於ても此書の諸論文に見る如き理解と洞察とは必らずしも求め易からざるものではないかと思ふ。其が外國に於ても類多からざる獨得の研究に屬するものなるとは、著者の序文やモットーに現れた拘負からも推察するに難くない。余は此書が學界の注目すべき名著の一に算へらるべきものなることを斷言する。固より經濟學の専門知識を全然缺如する余の如きものが此書の眞價を判定するといふやうなことは思も寄らぬのであるが、單に哲學の立場から見ても重要な文獻に屬するものなることは疑が無い。是れ余が其思想の大體を紹介し、之に就いて感じた所を記して、哲學殊に歴史哲學、文化哲學の研究に従事せらるゝ人々の注意を促したく思ふ所以である。

著者は經濟學が一個の學として立つにはカントの批判主義に従つて論理的基礎附けを必要とする

ことを詳細に説き、之を閉却せる從來の心理主義的經濟學が終に其概念構成の指導となる標準を缺くが爲めに獨斷論に陥る外無きことを示し、經驗科學としての經濟學が依つて立つべき先天的要素の必要を強調し、進んで其アプリオリの如何なる者なるかを決定する爲めに、先づ經濟學が自然科學に屬するか將た史的科學に屬するかを論じて、經濟學の認識目的が普遍必然の法則を定立する一般概念に盡すこと能はず、非合理的なる認識素材に制約せられるものであるから、斯學が自然科學に屬せずして史的科學に屬すべきものなることを説き、更に之を一般の史的科學から特殊化する爲めに經濟學の中心概念を求めて、全經濟現象を統一し、其論理的アプリオリとなるものとして貨幣概念を掲げ、此概念に關係せしめらるゝ人類の歴史生活が經濟生活となること、而して此概念自身が又歴史的產物として經濟的文化價值を具體的に

實現せんとするものなることを主張して居る。之に由つて經濟學が沒價値的の見地から時と處とに拘らざる普遍必然の法則を定立せんとする自然科學たる能はずして、文化價值に係らしめて歴史的生活を解釋する史的科學に屬するものなることが確定せられた譯であつて、斯學の専門學者たる著者の如き人から此説を聽くことは、余が初に述べたりッカートの科學分類に關する思想に有力なる實際上の保證を得ることになる。著者も現に自ら大體に於てリッカートの思想に賛同すると言明して居られるのである。併しながら著者は單にリッカートの哲學に基いて經濟學の認識論を説くに止まるものではない。更に重要な點に於てリッカートの説の不整合を正し、其謬見を改めて居る。これが我々哲學の研究に従事するものにとつて殊に注意すべき點であつて、余が著者に敬服措くこと能はざるも主として此點に因由するのである。

著者に據れば經濟學は價值概念に關係せしめて人類の歴史生活を解釋することを其認識目的とするものである。然るに經濟學は其史的研究以外に理論的専門があつて、普通の因果的法則を求めるといふのが普通に行はれる見解である。リッカードの如きも斯かる見解に從つて斯學を歴史と自然科學との認識の混成體たる兩者の中間範圍と見做した。然るに此の如き二元的認識成果の混成體を以て一個獨立の科學と思惟することは、著者に據れば其自身矛盾である。經濟學といふ一個の科學の對象を成すものは、一つの認識目的に由つて統一せられる認識對象でなければならぬのであつて、經濟學の對象なる經濟現象なるものは何處までも目的論的文化價值に統一せられる歴史的生活である。此様な認識對象を定立した後更に其表面に於て單一化的概念構成と並んで普遍的な概念構成をなすことは可能であるけれども、後者も其對象

として特定の文化價值に關係する歴史生活を豫想する。所謂理論的經濟學は此の如きものに外ならない。若し之を特殊の經濟的文化價值から離れて普通必然的法則を求むる自然科學に屬すと見做すならば、其は心理學であつて經濟學ではなくなる。リッカードの如く認識成果の混成體を説くのは一個獨立の學としての經濟學の成立を否定するに等しい。經濟學の法則は自然科學の法則でなくして、經濟的生活の上に於ける歴史的法則である。其學の統一根據は一貫せる經濟的文化價值の原理に在るのでなければならぬといふ。此著者の見解は確にリッカードの思想を純化補正するものであつて、之に由り狹義に於ける史學と一般の文化科學との區別も附けられるものであると思ふから、余は著者の説に賛同の意を表するに躊躇しない。理論的經濟學も經濟學の一部として成立するには經濟的文化價值なるものに由つて統一せらる

る對象を豫想することは疑を容れざる所であると思ふ。唯余が此點に就いて更に著者の教を乞はんと欲するの念を抑へ得ないのは其所謂理論的經濟學の歴史的法則の本質如何である。著者は滯歐中公にせられた其舊著 *Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze*. 1911 に於て此問題の詳細を論ぜられたので、本書の論文中には之に就いて審に説かるゝ所が無いが、余は前著を見んと欲して現下の事情之を手にし難きことを遺憾とする。著者は此書に於ては經濟學の法則が經濟學の認識目的に由つて定立せられたる認識對象の表面に於て行はるゝ普遍化の結果であつて、其は絶對普遍の自然法則たり得ず、飽迄所謂歸納的經驗法則の範圍を出づることを許されないものであるといはるゝのみであるが、嘗に經濟學に限らず一般に所謂歴史的法則が、單に歸納的經驗法則といふだけで其本質を盡すものでなく、更にカント以來問題とな

れる自由或は目的論原理の客觀性如何等に關聯し、一層深き研究を必要とするものなることは疑無いであらう。余は此點に關して著者の深き思索が我々を啓發するの日あらんことを切に希望するものである。殊に著者の如く又リッカートの如く心理學を單に自然科學に屬せしめず、斯かる自然科學としての心理學と方法を異にするディルタイの首唱した如き心理學の可能を認めるならば、此は假令リッカートの詳論した通り歴史の基礎といふことは出來ぬものであるとしても、其立する所の類型的通則が歴史的な生活の普遍化的認識の原理となり、著者の排せらるゝ心理主義的經濟學も此立場からして新なる意義を得、論理主義の形式を補ふに心理的内容を以てし、兩者相俟つて所謂理論的經濟學を完成することが無いとは言ひ難きやうに思はれるので、余は一層切に著者の此方面に對する研究の發表せられることを希望せざるを得

ない。此等の問題は哲學にとつて最も重要な意義を有するものであり、哲學專攻者の充分なる研究を要求するものなることは勿論であるが、著者の如き文化科學の専門學者からも周匝なる解明を與へられることは最も望ましいことであるといはなければならぬ。

著者がリッカートの説の不整合を正されたのは、嘗に今述べた經濟學の成立に關する問題には止まらぬ。更に其根柢に横はる哲學上一層重要な根本的の問題に及んで居る。リッカートが經濟學を目して自然科學と史的科學との中間範圍となすのは、氏が一般に自然科學の方法と史的科學の方法とを以て同一の客觀的現實を経験的認識主觀が *Auffassen* する相異なる方法論的形式に歸し、同一の現象が自然科學的に普遍的法則を求むる見地から、價値に關係せしめて個性を記述する立場からも認識することが出來ると認めたのに由るのであ

るが、著者に據れば此様に自然科學の方法と史的科學の方法とを單に經驗的認識主觀の觀方に歸し、何れの見地をも含まず、何れの方法をも豫想せざる客觀的現實なるものを認め、之を以て終にイデーに止まる所の判斷意識一般に對立し單に構成的範疇に由つて成立せしめられるものと考へるのは不當であつて、單に構成的範疇に由り成立せしめらるといふ客觀的現實なるものは實は抽象の産物に止まり、必らず更に何れかの方法論的形式を俟つて始めて經驗的現象が生ずるのである、此等の形式も有限なる認識を主觀に對しては超越的の意味を有するものたる以上、主觀の立場から見て果して構成的範疇と全然類を異にするものかどうかは疑はしく、寧ろ此も構成的範疇に屬すといふべきである、兎に角リッカートの如く科學的認識の二元主義の根據を單に經驗的認識の主觀の觀方の相違に歸し、兩種認識成果の混成體をも

一個獨立の科學と見做すのは不當であるといふ。此リッカートの構成的範疇と方法論的形式との峻別、之に關聯する認識主觀の兩種に關する説は確に氏の認識論の難點を成すものであつて、余は先科學的經驗の對象、リッカートの所謂客觀的現實なるものが實は已に何れかの方法論的形式に由る構成をも低度に於て含むものであり、科學の認識は此經驗の純化發展と目すべきものなること、從つて其對立する所の主觀は何れの場合に於てもイデオたる意識一般であつて、唯經驗的意識が之を實現せんとする其進歩の程度に相違があるに止まると考へる所から、著者の見解には全然同意を表するものである。著者のリッカートに對する批評は肯綮に當れるものであると信ずる。然らばリッカートの同一客觀的現實に對する觀方の相違といふ思想を排した著者は科學的認識の二元性の根據を何處に求めたかといふに、之を認識の根本に横は

る二元的事實に發見した。認識對象の構成には本來二要素が含まれて居る。一は合理的要素であつて他は非合理的要素である。此兩者は如何にするも歸一せしむること能はざる認識の終極要素であつて、其何れを基礎附けの根據とするかに從つて兩者の科學が生ずるのである。合理的なるものによつて基礎附けらるゝ普遍的認識は自然科學となり、非合理的なるものを基礎とする個性化の認識が歴史となる。固より非合理的なるものが直ちに歴史となるのではない。歴史も學として成立するには一定の認識形式に攝取せらるゝを要するのと勿論であるが、其形式原理は自然科學を構成する普遍的合理化のそれとは異なるものでなければならぬ。斯かる非合理的要素が史的文化科學成立の終極の根據を成すのである。かのベルグソンの哲學も此非合理的半面を明にせんとするものとしてのみ重要なる意味を有するといふのが著者の意見

である。此等の點は已に哲學の方面からも充分に認められた所であつて、著者が一方に於て論理主義を徹底しつつ、他方に於て此非合理的要素の意義を重視し、之を以て歴史的認識の根據とせられるのは認識論上最も進歩せる立脚地に立つものといはなければなるまい。此非合理的なるものから一般的文化價值及び特殊的文化價值を實現せんとするものとして史的科學の中心觀念が定立せられるに至る論理に就いては別に詳細なる説明を要することであると思ふが、とにかく著者の徹底せる思想には余は尊敬の念を禁ずることが出来ない。

今まで述べた所は經濟學の認識論に關する著者の思想であるが、著者の解する經濟哲學は單に此方面に盡くるものではない。一方に於て經濟學の認識に根據を興へ、其對象の可能を基礎附ける經濟的文化價值は他方から之を見ると、經濟生活が向ふ所の目的、理想、或は其準る所の規範と

なるものでなければならぬのであつて、其性質、構造、意義及び他の文化價值に對する關係等を究明するのは經濟學の形而上學とも稱すべきものである。經濟哲學は之に窮極し、認識論と相俟つて一つの體系を成すのである。所謂經濟政策なるものも斯かる經濟的文化價值を規範とし、之を客觀的普遍妥當性を有する内容に由つて實現せんとする要求に應ずるものとしてのみ意味を有するのであるから、其基く所は經濟哲學に在りといはなければならぬ。固より此様な價值、規範は心理主義經驗論の立場から實在的内容を賦與することは出来ぬものであつて、唯妥當する形式に止まらなければならぬことは大體西南獨逸學派の立場に立つて批判主義を採る所の著者の極力強調する所である。經濟的文化價值は一般的文化價值に對しては内容上の規定を有するものであるけれども、其係はる範圍内に於ては純然たる當爲の形式規範でな

ければならぬ。然らば斯がる純粹形式としての規範が例へば貨幣概念の如き存在の内容に由つて實現せらるゝことを求むといふ事實は如何に解すべきであらうか。此問題に對して著者が一般的の解答を試み、當爲と存在、價值と内容との關係を數學の極限概念に由つて解明しやうとせられたのが、今尙本誌の讀者の記憶に新なるべき「極限概念として此の文化價值」の論文であつて、此は本書の中に殘された根本問題の究明を企圖するものといふべきであらう。余は此論文に於て著者の研究の愈々深さに進まるゝを見て更に敬意を新にせざるを得ないものである。

以上述べた所が本書の内容の大體である。終に臨み余は著者に對し其眞意を誤解し、或は其説の本書を顛倒せる如き過無きことを保し得ざるを謝し、尙學界の爲めに其健在を祈りたいと思ふ。

彙報

心理學讀書會

三月十四日午後三時より心理學實驗室にて例會を開く。

○Müller-Freienfels; Studien zur Lehre vom Gedächtnis

深田文學士

○無意識の概念に關する一説 千葉助教

深田君の Archiv für die Gesamte Psychologia XXXIV

Band I, Heft 2 の右論文の紹介にして、氏は、從來、記憶問題が其の知的要素の方面のみに着目せられ感情方面は闕却せられたるに對し Müller-Freienfels 氏が特に此の方面に注目し記憶に三種の區別即ち

(1) Das orientierende Gedächtnis (2) Das reproduktive Gedächtnis (3) Das produktive Gedächtnis ありとて其の大要を述ぶ。

千葉助教は The Journal of Philosophy, P. Psychology and scientific Method; XIV, 20. 1719. 2 號をよめられたる Haebelin Hermann K 氏の論文 The concept of the unconscious の要領を紹介したり。

印哲宗教學會

三月二十日午後六時半より文科第九教室にて例會開催。